2015 年度（平成 27 年度）卒業論文

マックス・フリッシュ『ホモ・ファーバー』考

－科学技術的精神に潜む責任意識の曖昧さ－

指導教員

香田芳樹教授

慶應義塾大学文学部Ⅲ類

学籍番号　12190052

川　合　正　紀

目次

[1] 序 ····· 2

[2] マックス・フリッシュ：人とその時代 ····· 3

2.1. フリッシュの生い立ち ····· 3

2.2. 第二次大戦後のフリッシュの同時代的問題認識 ····· 5

2.2.1. スイスの国民性・メンタリティーについて ····· 5

2.2.2. 文化とは何かードイツとの関係から ····· 6

2.2.3. 文化とは何かーアメリカとの関係から ····· 7

[3] フリッシュと同時代の他の作家における科学技術的人間像 ····· 9

3.1. ブレヒトとの出会い ····· 9

3.2. 科学批判の系譜 ····· 11

3.3 ブレヒト：科学の覚醒『ガリレオの生涯』 ····· 12

3.4. デュレンマット：狂気の科学『物理学者たち』 ····· 15

[4] フリッシュ『ホモ・ファーバー』における科学技術的精神の破綻と責任意識 ····· 19

4.1.『ホモ・ファーバー』の成り立ち ····· 19

4.2. 作品世界のトポロジー ····· 22

4.3. 主人公ワルターの科学技術的精神 ····· 23

4.4. 運命・偶然・摂理 ····· 26

4.5. 悲劇性 ····· 29

4.6. 責任 ····· 31

[5] 結び ····· 36

あとがき ····· 39

準拠テキスト ····· 40

参考文献 ····· 40

[1] 序

東北大震災による福島原子力発電所の事故を機に、科学技術の本質と人間精神の深刻な解離が顕在化し、原子力発電所の安全性が地震や津波の確率的評価に原理的に依存しているという現代科学の本質は、我々の精神に重くのしかかってくる。自然科学を支える基本的な倫理は、原因と結果の論理体系であるが、人文科学は行為と責任の倫理を重視する。本来この二つの倫理は、互いに排斥し合うのではなく直交関係[1]にあるべきものである。しかし20世紀の二度にわたる大戦は、原因と結果の論理が暴力的に行為と責任の倫理を蹂躙する歴史上最大の事件となった。この暴力性は、今なお世界の各地で威力を振るっている一方、地球的規模の環境・災害問題に対応すべき人間精神にも深く翳を落としている。

マックス・フリッシュは、第二次世界大戦の戦中戦後を通して、技術者として作家として上記の二つの倫理観を「文化とは何か」と問うことによって考え続けた。文化の中での科学技術の果たす役割が、核兵器の出現によって極大化する時代に生き、その問題について常に思索していた作家のひとりがフリッシュであった。そのため彼の多くの作品の根底には、人間の科学技術的精神に関わる問題意識が通奏低音となって流れている。その唸りは、フリッシュ一人のものではなく同時代の他の作家と系譜的に共鳴している。すなわち科学技術的精神のなすところをブレヒトは、*Leben des Galilei*『ガリレオの生涯』において人間性の矛盾を内包した解放（回復）として描き、フリッシュは*Homo faber*『ホモ・ファーバー』(『アテネに死す』) において倫理崩壊をもたらす過程として、またデュレンマットは、*Die Physiker*『物理学者たち』において暴力による世界支配の妄想を呼ぶ狂気として描いた。本論文においては、この解放から破滅へ向かう科学技術的精神を描く作品の系譜と、日常的に内面化された「科学技術的精神」に潜む責任意識の曖昧性について、マックス・フリッシュの『ホモ・ファーバー』を通して考察する。

---

[1] 数学において直線や平面が垂直に交わることを一般に「直交」するという。その場合一方の直線ないし平面内の変化は、他方の直線ないし平面内の変化に影響を与えず両者は完全に独立関係にある。

[2] マックス・フリッシュ：人とその時代

2.1.フリッシュの生い立ち（Autobiographie[2]より）

M.フリッシュは、1911 年チューリッヒに生まれた。祖父はオーストリアから移住してきた鞍職人であり、父は建築家であった。父の希望は、息子がディプロム資格の正規の建築家になることであった。スイス人である母は若いころ帝政ロシアで保母をしていたことがあるが、それはひとえに広く世界を観たかったためである。こうした父母のそれぞれの希望と経験は、フリッシュの生い立ちに大きく影響している。

幼少のフリッシュは、仲間たちと違って『ドン・キホーテ』と『アンクル・トムの小屋』を夢中になって読むような少年であったが、その後サッカーと演劇にのめり込むようになった。殊に演劇については、金も暇もある大人がどうして毎晩劇場に足を運ばないのかと思うくらいであった。16 歳の時であるが最初の観劇の二か月後に、題名 Stahl という戯曲を書き、梗概をベルリンのドイツ劇場に送っている。劇場側は正式な原稿を要請してきたが、父親の無理解によって放置されてしまった。チューリッヒ大学ではゲルマニスティックを専攻するなかで、哲学こそ現実の生きた人間の深奥に迫るものだとの思いを持つにいたる。

22 歳で父を亡くし、生活の手段を考えねばならなくなったフリッシュは、フリーのジャーナリストとして Neue Zürcher Zeitung や Frankfurter Allgemeine 等に要求されることは何でも書くこととなる。断ったのは死体置き場の取材ぐらいであって、何でも見てやろう書いてやろうという記者魂は、その後のフリッシュの作家活動にとって極めて貴重な経験となった。記者として欧州の各地、特に母親が語ってくれた黒海沿岸の諸国、ギリシャやコンスタンチノープル等に取材活動をしたことは、若いフリッシュにとってはまさにロマンティックで貴重な体験であった。しかしこうした二年間は、生活のために書くことの意味を問い続ける期間でもあった。

25 歳で復学したが、女友達から「人生は失敗することもある」と言われ、さらに学費を援助してくれる知人もいたことから ETH（チューリッヒ工科大学）に転じて建築学を学ぶことになった。それは父の遺志を継ぐことでもあった。当初は月々の家計のための稼ぎを心配せずに高等数学に没頭できる身分に恐れさえ感じたが、青春の浪費ではないかとの思いも密かに抱いた。このままでは今までの人間関係が瞬く間に無くなってしまい、自

---

2 Frisch, Max."Tagebuch1946-1949 Autobiographie" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008　S.212-18.

分の人生の目的は達せられないのではないかとの不安すら感じられた。そのため、建築家として世界との関係をしっかりと保ちたいと考え、机上での設計だけではなく実際の現場での技術や実際的な造形により自分の構想を実現しようとした。こうして建築技術に専念しようと覚悟を決めたフリッシュは、それまで書いたものを一括りにして全て焼却している。もう書かないという心中の誓いが破られたのはその二年後、砲手として兵役に動員された日である。スイスといえども欧州の戦火から無縁でいられない、召集されたからには生きては帰れないかもしれないという思いが日記の再開となったのである。上官との確執から西南部の国境地帯（当初は Tessin 後に Engadin）に回されるが、そこは平穏であった。1940 年から終戦まで約 500 日間の兵役を勤めるが、その間に建築学のディプロムを取得し、設計事務所に勤めながら戯曲や小説を書いている。製図助手の女性との結婚もしている。建築家としては、チューリッヒの屋外プールの設計コンテストで最優秀賞を獲得している。その賞金で自分の設計事務所を開設することができ、建築設計と著作の時間配分を自由にできるようになった。こうした終戦をまたぐ数年間が、フリッシュの作家としての地歩を確立する時期となっている。その間の主な作品は次の通りである。

Die Schwierigen　1943

Bin oder Die Reise nach Peking　1944

Santa Cruz　1944

Nun singen sie wieder　1945

Die Chinesische Mauer　1946

終戦後のフリッシュは、それまでの閉塞状態を解消すべく頻繁に近隣諸国を訪れている。作家としてまた建築家としての二重の職業生活は、困難な中にも実りあるものであったが、特に文学と関係ない人々との仕事上の付き合いは幸せであったと回顧している。以上はフリッシュ自身が語った生い立ちであるが、作家としての原点が少年時代の観劇、大学での哲学の講義、新聞記者としての幅広い取材体験、建築家としての実務、二次大戦下の兵役等にあることが窺われる。

戦後の冷戦秩序の中でフリッシュの東欧諸国に対するシンパシーは強まり、スイス国内から共産主義者ではないかとの疑惑を持たれるが、ロックフェラー財団の奨学金による 10 か月のアメリカ滞在は、そうした批判の矛先をかわす契機となった。この間の建築家としての活動は、設計コンテストの一位入賞にみられるように社会から高く評価されているが、設計図面より著作の方が戦後世界の新しい秩序の回復のために貢献できるとの意を強くし、作家活動に専念することになる。

2.2. 第二次大戦後の フリッシュの同時代的問題認識

以上述べたようにフリッシュの作家としての基盤は、第二次世界大戦の終戦とほぼ時期を同じくして確立されているといえる。中立国スイスは、「平和を貫徹した理想国家」という虚構社会であるとの自覚の中での、作家としての出発であった。その当時のフリッシュの心境は、後の作品を陰に陽に性格づけている。戦後のスイス人のドイツに対するアンビヴァレントな国民感情、アメリカに対する不当な優越感、スイス人であることへのある種の後ろめたさ、こうしたフリッシュの同時代的問題意識の根底では、「文化とは、一体何か」が問い続けられた。

2.2.1. スイスの国民性、メンタリティー　について

1957 年 8 月 1 日、この日はスイスの建国記念日[3]であったが、各地で開催された記念講演会の一つの中でフリッシュは、300 名ほどの聴衆を前にしてフリースピーチを行っている。[4]　講演の結語は“Es gibt keine Freiheit ohne Risiko.”“ Machen Sie Gebrauch von der Freiheit.”[5] であり、建国記念日に相応しい呼びかけで終わっている。しかし講演内容は冒頭からスイス国民の抱く不安と自己過信、世界中から愛されているとの心地よい思い込みについてへの批判に満ちている。スイス人の不安とは一体何か、それは現実にそぐわない役割を演じる者の不安ではないかと指摘している。特に新しいものに対する不安、Idee に対する不安が科学技術分野の優秀な人材を海外移住させてしまっていると危惧している。経済の分野でもスイス人は、新規なことは避け人まねによりリスクを避け、労働者は生活が豊かになればなるほど新しいことに挑戦しなくなる。政治面でも同様であり、変化を避けることが習性となっている。このようにフリッシュの自国民に対する警告の弁はエスカレートしている。「Ideeを持つ人とそれを実行する人が別であることはおろか、固有なIdeeは何もない。外国の進歩の物まねが蔓延し、自己卑下は病的でありながら高慢でもある…。」こうした糾弾ともいうべき指摘は、フリッシュの作家としての評価が確立された 1954 年刊行の *Stiller* において主人公に語らせていることでもある。[6]

---

[3] 1291 年 8 月 1 日にハプスブルク家の脅威に対抗して、中央スイスの三州（カントン）が「自由と自治」を掲げて「永久同盟」を結んだことから、スイスの国家としての誕生の出発点として 8 月 1 日がスイスの建国記念日となっている

[4] Frisch, Max. “Festrede 1957 ” *Öffentlichkeit als Partner*　Frankfurt am Mein,　Suhrkamp Verlag, 1970. S. 7-14,151.

[5] Frisch, Max. “Festrede 1957 ” *Öffentlichkeit als Partner*　Frankfurt am Mein,　Suhrkamp Verlag, 1970. S.14.「危険を伴わない自由はない、自由を有効に使おう」私訳

[6] Frisch, Max.“Stiller” *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008. P558-562

この講演のなかで、フリッシュは問いかける。「スイスとは我々にとって何なのか」と。「故郷なるスイスか、祖国なるスイスか」と。「ウイリアム・テルの過去なるスイスか、エミール・ランドルト（当時のチューリヒ市長）の今なるスイスか」と。フリッシュの答えはそのいずれでもない。“Ich meine nicht Vergangenheit, ich meine nicht Gegenwart, sondern die Zukunft.“[7] とフリッシュの考えるスイスはあくまで将来のスイスである。

フリッシュの考えるスイスの将来とは、自己満足の小市民意識を克服した自由な社会である。その思いはヘーゲルの述べる「国家とは、個人が共同の世界を知り、信じ、意志するかぎりで、自由を所有し享受するような現実の場である」[8] と軌を一にしている。スイス人の自由、それは責任と危険を伴うが、語るべきことを他人から強制されず、自分の主義主張を語ることによっていかなる被害も蒙ることがあってはならない。思想と言論の自由は当然であるが、自由は使わないと錆びついてしまうと国民に警告している。この講演が行われた 1957 年は*Homo faber* の刊行された年であり、自由とは危険を伴うものであり、責任が求められるとの主張は小説の基調の一つとなっている。

2.2.2. 文化とは何かードイツとの関係から

フリッシュは、1949 年にスイス-ドイツ文化協会（在チューリッヒ）における戦後の対ドイツ関係の正常化に関する意見表明[9] の中で、戦中戦後の 10 年間を振り返って、かつて起こりえなかった人間の尊厳を貶める深刻な事態が生じた時期としている。ドイツとスイスの関係は、地理的な隣人関係と言語の共通性が両者の近親性の根源であったが、親戚だと思っていた人間が突如として非人間に変身してしまった。このドイツ人の変身は、人間性に対する信頼を根底から揺るがせたとスイス人フリッシュは言う。高度な文化を持つドイツ人がワルシャワのゲットーやアウシュヴィッツでなしたことは、文明・文化とは何かとの深刻な問いをフリッシュに突き付けている。同じ言葉をしゃべり、同じ音楽を愛するからと言ってその同胞が人非人化しないという保証にはならない。ドイツに交響曲の天才がいるからと言って、ドイツが文明国だとは言えないのではないか。 精神世界での卓越した芸術家が日常世界では無法な市民であることは十分あり得る。偶像化された文化は、それが芸術であれ科学であれ道徳的に病める文化であって、我々の救いとはならない。

---

7 Frisch, Max. “Festrede 1957 ” *Öffentlichkeit als Partner* Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1970. S.12. 「私にとっては、過去や現在ではなく未来だけが問題である」

8 ヘーゲル著 長谷川宏訳『歴史哲学講義』岩波文庫 1994 年 P.72.

9 Frisch, Max. “ Kultur als Alibi 1949 ” *Öffentlichkeit als Partner* Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1970. S.15-24.

我々スイス人にとっての文化とは、芸術や科学の領域での個人的な卓越性ではなく、共同体における市民の貢献である。こう述べるフリッシュはしかし「病めるドイツ、健全なスイス」と単純に確信しているわけではない。

ドイツ問題は、スイスにとってだけではなく全欧州にとっての問題である。チャーチルがベルリン問題に関して配下のドイツ占領責任者に対し“Das Geschehene endlich geschehen sein lassen”「生ずべきことは、生じさせよ」と指令したことは、フリッシュにとって大きな衝撃であった。今世紀（20 世紀）はカタストロフの時代であるが、かくも簡潔な表現にこれほど愕然とさせられたことはなく、我々自身が同じように考えることになるなら、その未来は危ういとフリッシュは警告している。[10] ましてやこうした考えをドイツ国民がなお持ち続けるなら、民族全体がカインの烙印を刻されることになるであろうとフリッシュは危惧している。

このフリッシュの危惧はドイツだけではなくスイスにも向けられる。出来事が実際に恐怖となって生じる前に、新たなUntat（非行）が惹き起こされ、当初抱いていた恐怖は覆い隠される。その新たな非行的事態の魅惑的ないかがわしさが、当初の事態についての責任の追及と将来への備えを放置させることになる。この点において、スイス人はドイツ人と同じであると云うのだ。こう語るフリッシュの心底には、ドイツ語を話す人間でありながら、ドイツ民族の運命から疎外されているとの無力感がある。その疎外感と無力感を含むフリッシュの言説が、彼を極めてスイス的でないスイス人であると、同時代人が見做す原因となっている。[11] このスイス-ドイツの関係についての問題意識は、ほぼ 10 年後の 1957 年*Homo faber* において根底から問い直されることになる。またヨーロッパ全域が呻吟している状況下で、スイス人であることの後ろめたさは*Andorra* や *Biedermann und die Brandstifter* の主題の底流を成している。

2.2.3. 文化とは何かーアメリカとの関係から

フリッシュは、1952 年に約一年間のアメリカ滞在の経験を踏まえて、スイス建築家協会でアメリカについて講演している。[12] その中で、ヨーロッパのアメリカに対する尊大さは驚くばかりであり、戦後になってアメリカについての知識は増えたが、過去からの先

---

10 Frisch, Max. “ Kultur als Alibi 1949 ” *Öffentlichkeit als Partner* Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1970.S17.

11 Der Ingenieur, *Der Spiegel* (Hamburg) 25.Dezember, 1957 S.54-56.

12 Frisch, Max. “ Unsere Arroganz gegenüber Amerika 1952 ” *Öffentlichkeit als Partner* Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1970 S. 25-35.

入観はますます強くなるばかりであると嘆いている。フリッシュは精神文化が物質文化より高等だとは考えない。ヨーロッパの文化とアメリカの西部開拓の文化とは当然異なり、西部開拓の中で生まれ発展した音楽においては、芸術性よりエンターテイメント性が優越するのは文化として当然であるとする。フリッシュが重視するのは、文化の優劣ではなく文化の相互関係である。旧いヨーロッパにとってアメリカは、古代アテネにとってのローマのような関係であるとする。ローマ文化を受容することは不可能であったギリシャ人はしかし、その精神性の変質にもかかわらず存在しつづけたように、ヨーロッパも同様に依然としてアメリカにとって重要な存在でありつづけている。そしてヨーロッパが精神的な中心地だからと云って、アメリカに対する尊大な優越感を持つ理由にはならないと強調する。

以下は、1957 年に *Homo faber* が出版されて間もなく Der Spiegel に掲載された書評の中の一節である。

> 技術者Faber は、スイスの建築家で劇作家かつ小説家のマックス・フリッシュが今秋発表した*Homo faber*の主人公である。フリッシュがアメリカ人を念頭につけたこの辛辣なタイトルは、スイス人作家としてのアメリカ合衆国に対する見方を示しているものと考えられる。作家はこれを「自分自身に対する怒り」として婉曲に表現しているが、技術者Faber は “american way of life „ をこの世における当然の生き方として受け入れ、享受する人間である。…技術者として世界を手中に治めようとするFaber 的な傾向は、アメリカ合衆国においてもっとも顕著にみられるとフリッシュは考えている。[13]

こうした見方はフリッシュからすれば、アメリカによってナチズムから解放され、マーシャルプランによって復興が確かになりつつある戦後ドイツの「知識人」のまさにアロガンスであるということになる。　この Der Spiegel の作品の本質からは的の外れた書評は、まさにフリッシュが危惧するヨーロッパ知識人のステレオタイプ性を露見している。*Homo faber* に見られるアメリカ文明批判だけを小説の主題として評価するのはあまりにも偏狭である。しかし、その偏狭性、アロガンス性こそフリッシュが主人公 Faber に仮託した普遍的な人間性の問題点であるといえる。

---

[13] Der Ingenieur,　*Der Spiegel* (Hamburg) 25.Dezember, 1957　S.54-56　私訳

[3] フリッシュと同時代の他の作家における科学技術的人間像

3.1.ブレヒトとの出会い

第二次大戦後アメリカからヨーロッパに帰還した直後のブレヒトは、1947 年から 48 年にかけて一時的にチューリッヒに在住し多くの文人と交流したが、若きフリッシュ（36～37 才）もその中にいた。フリッシュは建築家として活動していて、ブレヒトを自分が設計したLetzigrabenの市営野外プールの建築現場に案内したことがある。[14] その時のブレヒトは、フリッシュとの文学的会話より建築という技術の専門性に畏敬の念を示した。同行したルートゥ・ベルラウは、すぐに退屈してまったが、ブレヒトは大胆にも 10 メートルの高さの飛び込み台まで登っている。ベルラウはカメラを構えて、ブレヒトに飛び込み板の先の方へ行くようにと促すが、さすがに怯んだのか断っている。建築途上で足場の組まれた状態であったが、ブレヒトの脳裏には技術的構造物に対する不安感が過ぎったのであろう。

フリッシュは力学的（科学的）な説明によってその不安感を和げようとしたが、地上に降り立って初めてブレヒトにはそれを聴く余裕が持てたのである。ベルラウのように技術的構造物に最初から興味を示さない人間は多い（ベルラウが女性だからだとフリッシュは述べている）が、半面ブレヒトのように技術者の仕事に大きな畏敬の念を抱いていても、その成果物には不安を覚えるのも専門外の人間にとってはありがちなことである。高所に立って不安に取りつかれているブレヒトに対して、足元の構造物の安全性、信頼性を構造力学的に説明しようとするフリッシュの姿勢はあくまで建築技術者としての科学的確信に基づくものであったであろう。しかしブレヒトのその場における不安を解消することは出来なかったことが窺われる。

建築学の「素人」であるブレヒトに対する「講義」であったとフリッシュは回顧しているが、フリッシュはどのような説明をしたのだろうか。「講義」というからには、ラーメン構造やトラス構造 [15] における柱や梁の応力とひずみに関する材料力的学理論に始まり、飛び込み板の片持ち構造については特に入念にその力学的特性について説明したことであろう。そして最後に、構造物の信頼性を確保するための「安全率（安全係数）」についても言及したはずである。いかなる精緻な理論も「素人」に対しては安心感を与えることが出来ないが、緻密な計算結果にたいして乱暴なまでに余裕も持たせるための「安全率」

---

14 Frisch, Max. *Erinnerungen an Brecht*：Berlin , Friedenauer Presse, 2009.　S.14

15 ラーメン構造、トラス構造：材と材を結合した骨組み構造。現代の建築物のほとんどはこの種の構造からなる。

の存在はブレヒトを納得させたであろうか。「安全率」とはこの場合、構造物の強度を想定される負荷に対して何倍まで耐えうるように設計したかというその倍率の数値である。しかし負荷の想定は、あくまで確率的であり破壊をもたらす想定外の巨大な負荷の発生確率はゼロではありえない。この科学技術的精神と人間の常識的な感覚のギャップを糊塗する「安全率」という概念の破綻をブレヒトも、フリッシュも十分に予感したに違いない。「安全率」の曖昧さは、科学に対する信頼感を揺るがす深刻な危険性を秘めている。それは「素人」の素朴な期待感に付け入るまやかしに過ぎないとも言える。

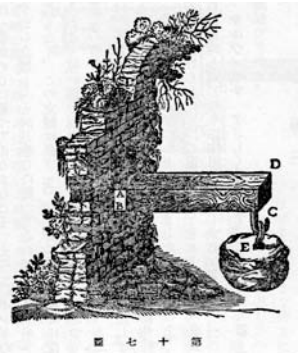
この時の二人の対話の伏線として、ブレヒトの戯曲『ガリレオの生涯』があったことは想像するに難くない。ガリレオがその晩年の幽閉の期間中に心血を注いで著した『ディスコルシ』(『新科学対話』) の完成は戯曲の重要なモティーフであるが、その中に飛び込み台の片持ち構造に類似する城壁から水平に突き出された梁が図示され、構造力学の命題例として詳細に討論されている。[16] フリッシュは建築学の専門家として、ブレヒトが描いたガリレオのこれらの著作の内容に言及して、議論したことであろう。この二時間に及んだブレヒトとの建築現場での交流を振り返って、「専門家は、往々にして本質的な問いを忘れがちである。素人から聞いて初めて自分が考えもしなかった問題に対する回答を見出すことがある」とフリッシュは述懐している。[17] またブレヒトも、文学についても現実から遊離して観念や気分、思い込みや大げさな冗談に逃げ込むようであるなら、それは不毛であるとフリッシュに対して語っている。建築現場にたたずむ二人の姿の中に、その後のフリッシュの作品の底に見え隠れする「科学技術的精神の暴力的破壊性に対する市民的不安感」への予感を見て取ることができる。

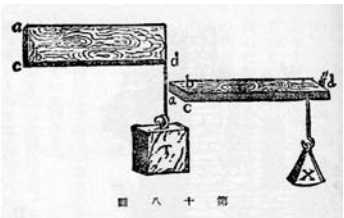
このブレヒトとの対話から、フリッシュは「相互理解がイデオロギーを超えて成り立つ

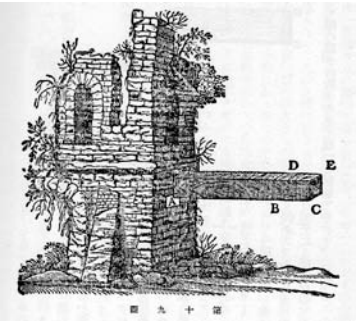
---

16 ガリレオ・ガリレイ著 今野武雄、日田節次訳『新科学対話（上)』岩波文庫 1937 年 P164-9

ガリレオは片持ち梁の力学命題を説明するために次の図を掲げている。







17 Frisch,Max.“Tagebuch1946-1949”Romane,*Erzählungen,Tagebuch*: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008　S.259

」ことを確信するが、[18] それはまた両者が科学技術的精神の矛盾を内包する本質において通底していることへの確信でもある。その精神の矛盾の葛藤は、フリッシュのその後の作品に主題として、伏線として、隠喩として様々に変化して現れてくるのである。特に *Homo faber* の主人公ワルターの性格においては、ブレヒトの言う「現実から遊離した観念や気分、思い込み」が主要な特徴となっている。

3.2 科学批判の系譜

ホセ・オルテガは、1930 年に「あらゆる文明の中でも、自然についての厳密な科学、そして科学的技術としての性格を持つ現代文明の底部には、ガリレオの姿がひそんでいる」[19] と述べるとともに、ガリレオの拓いた「近代を形成するこれら全ての原理は今日大きな危機に見舞われている」[20] と指摘している。これを受けるように、フッサールは 1936 年『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の中で長文を割き、「ガリレオによる自然の数学化」の題名のもとにガリレオ批判を行っている。その内容は、自然科学が精密化のために技術化し科学技術となったため、生活世界の意味基底からますます乖離していく危機的な様相を論じたものである。[21] 伊東俊太郎は、この間の事情をオルテガ、フッサールル、ブレヒトを通してガリレオの業績の両義性として論じている。[22]

建設現場における技術的構造物を前にした、生活世界からの「素人」としてのブレヒトと専門家としてのフリッシュの二人の対話の核心は、まさにこの科学技術の危機に関してであったのではなかろうか。前述したフリッシュの回顧は、文学が科学技術の過ちの轍を踏むことがないようにとの自戒を込めたものと言えよう。フリッシュは、ブレヒトをガリレオのような人だと述べている。[23]　精力的ではないが、常に現状を観て新しい発見に敏感に対応できるよう備えるブレヒトの姿、立ち机が似つかわしいブレヒトの仕事のやり方、それらがガリレオを連想させたようである。しかしガリレオの名を引き合いに出すからには、単なるブレヒトの態度、姿勢についての言及であるはずはない。ブレヒトの作品 *Leben des Galilei* が念頭にあったと考えるのが自然である。

オルテガの「生の哲学」によるガリレオ批判をさらに深めて、ヨーロッパの危機として

---

18 Frisch, Max. *Erinnerungen an Brecht*：Berlin , Friedenauer Presse, 2009. S.14

19 オルテガ, ホセ著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局　1969 年 P.4

20 同　P.5

21 フッサール, E. 著、細谷恒夫・木田元訳「ガリレイによる自然の数学化」『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』1974 年　中央公論社　P.69-75

22 伊東俊太郎「ガリレオと科学・宗教」『伊東俊太郎著作集第 6 巻』麗澤大学出版会　2010 年 P17-27,246-54

23 Frisch, Max. *Erinnerungen an Brecht*：Berlin , Friedenauer Presse, 2009. S.7.

哲学的に論じたのがフッサールであるとすれば、科学技術的精神による人間性の回復を確信する巨人ガリレオが、「生のパースペクティブ」[24] からは生活世界の秩序の破壊者として苦悩する市民であり父親であったという両面性から描いたのがブレヒトである。

ブレヒトは *Leben des Galilei* を 1938 年に発表しているが、そのおよそ 20 年後の 1957 年にフリッシュが *Homo faber* を刊行し、*Erinnerungen an Brecht* を発表したのはさらにそのおよそ 10 年後の 1966 年のことである。その間にデュレンマットが *Die Physiker* を 1962 年に発表している。科学技術的精神は、*Leben des Galilei* においては人間性の解放（回復）をもたらし、*Homo faber* においては倫理崩壊を惹起するが、*Die Physiker* においては狂気の科学技術的精神として暴力による世界支配の妄想を呼ぶこととなる。この解放から破滅へ向かう科学精神の蘇生の可能性を、フリッシュは *Der Mensch erscheint in Holozän* で描いているが、それは *Erinnerungen an Brecht* を発表してからおよそ 10 年後の 1979 年のことである。20 世紀の中葉から後半にかけてパラダイムシフトする科学技術的精神はブレヒト、デュレンマット、フリッシュの作品に色濃く反映されている。 *Leben des Galilei* から *Der Mensch erscheint in Holozän* に至る一連の作品群の中央に位置する *Homo faber* に描かれた科学技術的人間像に焦点を当て、作家が提起する科学技術的精神の根底に潜む責任意識の問題を考えなおすことは、きわめて現代的な意味があると論者は考える。

3.3 ブレヒト：科学の覚醒『ガリレオの生涯』

—人間性の回復とガリレオの矛盾—

ガリレオによって確立された近代的科学技術精神の両義性をブレヒトは、『ガリレオの生涯』*Leben des Galile*（1938）で描いている。本書には三つの稿があり、初稿は「デンマーク版」と言われ、ナチス政権下での 1939 年出版であった。その覚書の中で「信仰は迷信に格下げになり…我々を支配してきたものを、今や我々が支配するのだ。…彼（ヒトラー）も『新時代』を約束した…」[25] と述べられているように、核物理学に代表される科学技術が拓く新しい時代の息吹の中で、ナチズムの偏狭性に対する批判を含んでいるが、ガリレオによる近代的科学技術精神を肯定的に評価した作品となっている。第二の稿は、「アメリカ・英語版」と言われ戦後 1947 年の出版である。ブレヒトは、1941 年にアメリカに亡命し、その地で 1944 年に英語版の第二稿に着手するが、45 年広島・長崎への

---

24 オルテガ, ホセ著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局　1969 年 P.93

25 ブレヒト著　谷川道子訳　『ガリレオの生涯』光文社　2013 年　P.277

原爆投下の報を聞き、あらためて人類の科学技術的知の責任を問い直すべく、ガリレオ像を再構築しようとした。そのため「デンマーク版」に比較して科学技術者としてのガリレオの責任がより強調され、断罪的な表現が強くなっている。この戯曲のニューヨーク公演を前に、マッカーシズムの「赤狩り」により 1947 年 11 月非米活動査問委員会に喚問されたブレヒトは、チューリッヒ経由でヨーロッパに帰還する。フリッシュとの邂逅はその途上のことである。最終稿となる第三の稿は、「ベルリン版」と言われ、*Homo faber* が発表される一年前、1956 年に出版された。その背景には水素爆弾の開発に関わるローゼンバーク事件やオッペンハイマー事件があり、科学技術者の責任が作品の中でより大きく問題提起されている。ブレヒトはその注の中で「ガリレオの犯罪は近代科学の原罪だとみなすことができるだろう。…原爆は技術的な現象としても社会的な現象としても、ガリレオの科学的な業績と社会的な機能不全が生み出した、古典的な最終産物である」[26] と述べている。以下のこの「ベルリン版」に依拠し、核兵器開発にまで突き進んだ科学技術的精神の問題性に連なるパースペクティブから作品を考察する。

オルテガとフッサールによる哲学的ガリレオ批判は、ブレヒトにおいては「科学者ガリレオ」、「教会と対峙するガリレオ」、「人間ガリレオ」、としてオルテガの「科学のパースペクティブ」「宗教的神学的パースペクティブ」「生のパースペクティブ」[27] に対応して語られる。「科学のパースペクティブ」からは、ガリレオのもっとも一般化された典型像として「ガリレオは望遠鏡で、コペルニクスの宇宙体系説を証明する現象を発見する。その研究がどういう結果をもたらすかを友人に警告されたガリレオは、人間の理性に対する自らの信念を披歴する」[28] と語られ、その信念は弟子アンドレアに「科学の掟はただ一つ、それは科学に貢献することです。」[29] として引き継がれる。そして「私は宇宙の体系についての本を書いた。それだけだ。それがどう使われようが使われまいが、私の知ったことではない」[30] との異端審問を控えたガリレオの嘯きもそのまま現代まで引き継がれたのである。

オルテガの言う「宗教的神学的パースペクティブ」は、現代的には「哲学的倫理的」かつ「政治的」も包含するパースペクティブであると言えよう。自由都市ベネチアからローマ・カソリックの影響下にあるフィレンツにあえて居を移したガリレオの「科学者は、真理がどういう結果をもたらすか、問う必要はない」との確信に対して、ある哲学者は「真

---

[26] ブレヒト著　谷川道子訳　『ガリレオの生涯』光文社　2013 年　P.299
[27] オルテガ, ホセ著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局　1969 年　P.93-4
[28] ブレヒト著　谷川道子訳　『ガリレオの生涯』光文社　2013 年　P.49
[29] 同　P.235
[30] 同　P.193

理は我々をとんでもない方向に導くかも知れないのですぞ」[31] と厳しく警告する。またある天文学者は「我々天文学者に難題を差し出すような現象は、存在します。だが人間は、すべてを理解しなければならんのでしょうか」[32] と問いかける。ガリレオはこれらに答えることはない。ヴァチカン教皇庁がガリレオの発見を是認したときの「今度こそ、神学者たちも天の軌道をどう修正したらよいのか分かるようになるだろう。あなたの勝利です。」との声にもガリレオは「勝ったのは私ではなく、理性ですよ」[33] と答えるだけである。異端審問所での拷問に掛けるとの脅しに屈し、自ら地動説を撤回したあとのガリレオは、「私は、自分の知識を権力者に売り渡してしまったのだよ。それを使うも使わないも、悪用するもしないも、どうぞお好きなように、とね」[34] と自嘲するが、密かに『新科学対話』を完成させる。この真理の詰め物の国外持ち出しを委託したアンドレアに対して、「ドイツを通るときには真理を上着の下に隠して、用心するんだよ」[35] と注意するくだりにはナチスドイツに対するブレヒトの危惧が込められている。

「生のパースペクティブ」は、ブレヒトにとっては字義通り日常の生活世界への眼差しである。「人間的な弱さは、科学とは関係無い」と毅然として言い放つ若き科学者アンドレアに対してガリレオは、「天体の観測を求める闘い、ローマの主婦たちの牛乳を求める闘い、科学はこの両方の闘いに関わっている」[36] と諌めるのである。しかし自身のローマ教会に反抗する科学的主張が娘ヴィルジーニアの結婚を破談に導いた時、家政婦のサルティから「でも娘さんの幸せまでその大足で踏みにじる権利は、あんんたにも、断じてないんです」[37] と糾弾されている。ペストで孤立化した街の中で、三人の子持ちのおかみさんの窮状を心配する老婆の呼びかけにガリレオは応えず、自身の飲み物の不足をかこつだけである。[38]

「お父上にはあなたが必要になるでしょう。偉大さというものは、神からそれを授かった人間にとっても、必ずしも担いやすいものではないのです」[39] とのヴィルジーニアへの語りかけは、異端審問所長官のものである。ガリレオの科学者としての偉大性を生活世界

---

31 ブレヒト著　谷川道子訳　『ガリレオの生涯』光文社　2013 年　P.90
32 同　P.113
33 同　P.118
34 同　P.240
35 同　P.241
36 同　P.238-9
37 同　P.172
38 同　P.106
39 同　P.138

から支えるヴィルジーニアの心労を真に理解するのは、旧来の神の秩序の維持のためガリレオを糾弾しようとしている異端審問所長官その人である。それは「科学」、「宗教的神学的」、「生」のすべてのパースペクティブから語られた言葉として、生の全体性の実相の深さと複雑さを余すことなく伝えている。

科学技術精神がこの生の実相と親和しない限り、ブレヒトがガリレオに語らせる最後の言葉「時を重ねれば、発見すべきものはすべて発見されるだろうが、その進歩は、人類からどんどん遠ざかっていくだけだろう。…　新しい成果に対して君たちがあげる歓呼の叫びが、全世界のあげる恐怖の叫びになってしまうという日がいつか来るかもしれない」[40]は現実となってしまうだろう。デュレンマットとフリッシュはその危惧をそれぞれの仕方で描いたと言える。

3.4. デュレンマット：狂気の科学『物理学者たち』

ブレヒトが『ガリレオの生涯』で提起した科学技術的精神の問題点を踏まえて、デュレンマットは「科学のパースペクティブ」からその破滅的な成り行きを真正面から見据えた戯曲『物理学者たち』を著した。主人公メービゥス(Johan Wilhelm Möbius)は、物理学上の最終問題であった「重力の問題」と「場の統一理論」の双方を解決し、想像を絶するエネルギーの解放による途方もない技術の可能性を発見したが、これが人々の手に落ちることによる世界の破滅をなによりも恐れた。ブレヒトが最後にガリレオに語らせた「全世界のあげる恐怖の叫び」が現実化しそうになってしまったのである。メービゥスにとって、これを防ぐ道はソロモン王の顕現の幻覚を告白し、精神病棟に自ら閉じ込められること以外に考えられなかった。

メービゥスの機密を探ろうとする二人の物理学者である自称ニュートンとアインシュタインは、狂気を装ってメービゥスと同じ病棟に患者として潜入する。両人とも物理学の世界的権威であるが、東西の冷戦構造の中でそれぞれ西側と東側の諜報機関のエージェントに変節し、科学者としての良心を売り渡してしまっている。「私はただ自然を観察して理論化し…数学の言語で記述し…公式化するが…技術屋は公式のみに関心を示し…娼婦のひもと同じである…そして機械をつくるが…機械というやつはその発明のもとになった認識と無関係になって初めて役に立つ…そして原子爆弾をつくる。」[41] 現実化したブレ

---

[40] ブレヒト著　谷川道子訳　『ガリレオの生涯』光文社　2013 年　P.239

[41] デュレンマット,フリードリッヒ　山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』鳥影社　2013 年　P.320

ヒトの危惧をデュレンマットは、良心を体制に売り渡した最高頭脳の物理学者ニュートンにこのように語らせている。ニュートンが取り繕う自己弁護は、ブレヒトの描くガリレオの信念といささかも変わっていない。ニュートンは云う：「重要なのは科学の自由であり…科学者はパイオニアである…科学が切り開いた道をうまく進めるかは、人類の問題であって、われわれの問題ではない。」[42]

メービウスに現れるソロモンは、黄金の姿をとって両義的である。それは、最高の真理と知恵を神から与えられながら、破滅をもたらす黄金の偶像を跪拝するソロモンの両義性である。[43] このソロモンの幻像は、真理と知恵の世界平面を歩むうちに、知らず知らずのうちに現世を破滅に導く偶像的世界平面に何の障壁も抵抗も意識することなく踏み込んでしまうという、まさに「メビウスの平面」[44] に生きているというメービウスの狂気の実相を暗示している。狂気の平面と正気の平面は、裏腹の関係ではなく捻じれて連続しているのである。メービウスによる看護婦モーニカの殺害は、ニュートンとアインシュタインの場合のような佯狂の発覚を恐れる単純な看護婦殺害とは異なり、ソロモンが顕現したことの秘密の発覚と、破壊的な「叡智」の拡散を恐れたためである。科学技術的精神においては、狂気と正気を峻別する境界は曖昧である。

黄金のソロモンの幻像は、院長である老嬢マティルデにも現れていた。しかしマティルデにおいてはソロモン王の両義性である真理と偶像、正気と狂気の「メビウスの環平面」は自覚されていない。精神科医としての彼女の科学的精神は、父祖の政治的、経済的世界における卓越した能力の前に跪拝している。良心においてメービウスは正気であり、マティルデは狂気である。メービウスの発見のすべてを盗写により手に入れたマティルデは、三人の世界的物理学者を患者として永遠に幽閉し、必要な資本を集め、巨大会社を設立し、一大トラストを形成してあらゆる発明を可能にするシステムの確立を計画する。マティルデの狂気の嘯き「王は私を憐れんだ…私のトラストは、支配し、…征服し…太陽系の資源を利用しつくし、アンドロメダ大星雲へと乗りだす…計算通り…世界のためではなく…このオールドミスのために」[45] に対してメービウスは二人の物理学者を前に述懐する。「

---

42 デュレンマット,フリードリッヒ　山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』鳥影社　2013 年 P.377

43 聖書『歴代誌・下』3：1-14 によれば、ソロモン王は神殿を金の装飾で埋め尽くした。

44 メビウスの平面：「メビウスの帯」上の平面。「メビウスの帯」は、数学者 August Ferdinand Möbius が発見した特殊な位相図形。長方形を一回ねじって対辺を貼りつけて得られる図形。その表面をたどると表裏の区別がなくなり元の表裏の二つの平面は一つの連続した表面となる。
実在の数学者 Möbius を「メビウス」と表記し、作品中の人物 Möbius を「メービウス」と表記

45 デュレンマット,フリードリッヒ　山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』鳥影社　2013 年 P.395

いったん考え出されたことは、もはや撤回できない」[46] と。「科学のパースペクティブ」は、歪曲された狂気に支えられて、現代の神学である「政治経済のペースペクティブ」の背後へと後退を余儀なくされる。

ブレヒトの提起したもう一つの科学批判である「生のパースペクティブ」からは、メービゥスの家庭崩壊が挿話的に語られる。メービゥスを経済的に支えてきた妻リーナは、離婚し宣教師夫人となって最後の別れのため、子供たちを伴って病院を訪ねるが、メービゥスの感情が動くのは物理学者になりたいという長男に対し「それはだめだ、…絶対に。私は断じてゆるさないぞ」と激高するときだけである。『ガリレオの生涯』では娘ヴィルジーニアは、ガリレオを生涯支えつづけ「科学」と現実の「生」とは断絶していない。『ガリレオの生涯』のヴィルジーニアと同じ位置を占めるのは『物理学者たち』ではリーナであり、家政婦サルティは三人の看護婦たちであるが、リーナは去り看護婦たちは自身が世話をしてきた物理学者たちに殺害されてしまう。『ガリレオの生涯』においてかろうじて保たれていた「科学」と「生の世界」の関係性は、『物理学者たち』では完全に断ち切られてしまっている。

ブレヒトの提起したガリレオの矛盾の行く着くところとして、デュレンマットが科学技術の終末的局面を描いたのは、冷戦構造のなかで熾烈化する米ソの核兵器開発競争に対する強い危機感からである。[47] その根底にある科学技術的精神の危険な本質について、メービゥスに次のように語らせている。

> 理性が命じた…認識可能なものの限界に突きあたった…正確に理解できるいくらかの法則と、把握できない諸現象の基本関係は分かっているが、残りの広大な部分は神秘のままで、理性が近づけるものではない…科学は恐ろしいもの、危険なもの、認識は致命的なものになった…物理学者は現実に降伏するだけ…現実はわれわれのせいで滅んでしまう…知識を撤回しなくてはならない。[48]

デュレンマットは、この科学技術の本質を同時代の世界的危機を通してエリート物理学者たちの悲喜劇として告発したといえる。しかし作家は、単純に同時代の危機的状況を批

---

46 デュレンマット,フリードリッヒ　山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』鳥影社　2013 年 P.396
47 酒井謙一「科学者と社会－デュレンマットの『物理学者たち』－」京都工芸繊維大学繊維学部学術報 23 号　1999 年 P.13-22
48 デュレンマット,フリードリッヒ　山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』鳥影社　2013 年 P.382

判しているのではない。核兵器の開発という危機的状況を通して、その根底にある科学技術の本質的な危険性を糾明しようとしているのである。この危機的状況は、老嬢マティルデ院長の狂気というZufall[49] により、ドラマトゥルギー的には「どんでん返し」として描かれているが、[50] より根源的に深刻なZufallは、メービゥスにソロモン王が顕現し、理性と狂気の境界が消滅したことである。科学技術の革新的な進歩が往々にしてセレンディピティ [51] というZufallによってなされてきたという事実に対し、黄金のソロモン王の顕現は破滅をもたらす負のセレンディピティである。このセレンディピティの両義性は、科学技術の因果性や倫理性とは無関係に生じることなのである。

増本浩子は「フリッシュが人間の内面に目を向けて、人間の意識そのものを舞台に乗せるのに対し、デュレンマットの方は人間をとりまく世界のあり方に目を向けて、現代の世界がかつての整合性ある秩序を失ってしまったことを示すために『起こり得る最悪の方向転換』という仕掛けを使う」[52] と述べている。フリッシュの『万里の長城』とデュレンマットの『物理学者たち』を比較論考した結論であるが、その「内面性」と「起こり得る最悪の方向転換」は『ホモ・ファーバー』においては、主人公の内面を支配する科学技術的精神と、父娘の近親相姦と言う最悪の事態をとおして、より複雑かつ深刻に語られている。『ガリレオの生涯』が胚胎する科学技術的精神の深刻な矛盾は、『物理学者たち』においては、社会的危機として描かれ、『ホモ・ファーバー』においては、平凡な市民の精神の奥底に生じる倫理意識の崩壊として語られる。

---

49 Zufall とは「意外な出来事、偶然、運命的な出来事」の意味で使われている。

50 内尾一美「デュレンマットの『物理学者たち』について」『山口大学教養部紀要』11 号、1977 年、P.69-77

51 『広辞苑』によれば、「セレンディピティ」とは「思わぬものを偶然に発見する能力、幸運を招き寄せる力」である。ニュートンの林檎の逸話が事実であれば、古典物理学はセレンディピティによって確立されたと言えるし、生命科学の革命的発見であるワトソン、クリックによるＤＮＡの二重らせん構造は生物学者と物理学者偶然的な共同によるセレンディピティの産物である。

52 増本浩子「フリッシュとデュレンマット」『姫路独協大学外国学部紀要』15 号、2002 年、P.166

[4] フリッシュ『ホモ・ファーバー』における科学技術的精神の破滅と責任意識

4.1.『ホモ・ファーバー』の成り立ち

『ホモ・ファーバー』の主人公は、科学技術者として歴史に名を残すような卓越者ではく、ビジネス社会で活動する一介のエンジニアである。その彼が主人公たり得るのは、「我々の先人でかけがえのない人というのは、その業績が卓越していたからではなく、誇るべきではないが、何らかの秘密を抱いていた人である。」[53] と、フリッシュが語る「かけがえのない人」の典型だからである。タイトルの*Homo faber*は主人公Walter Faberに妻ハンナが与えた渾名に由来する。中野孝次が『アテネに死す』という題名で翻訳したため、この作品の日本における受容の仕方は、少なからずトーマス・マンの『ヴェニスに死す』を連想させる方向に作用されたと思われるが、本稿で論考しようとする科学技術的精神のパースペクティブからはかけ離れている。

ハンス・ヨナスの：

> homo faber[54] の外界の事物に対する勝利は、homo sapiensの内部構造における勝利でもある…元来homo faber はhomo sapiens に従属して仕える部分器官であったが。つまり、技術はその外在的な効用とは別に、人間の主体的な目的をつかさどる中心的な位置において重要度を増しているのである [55]

との指摘は、本書のテーマの背景を余すところなく伝えている。後にフリッシュが『アテネに死す』との題名に不満を持っていることを知った中野は、*HOMO FABER* を併記することにしたが、本書の表題はあくまで *Homo faber* でなくてはならない。何故ならワルターの「科学技術的精神」すなわちヨナスが指摘している homo faber 的性格が作品の主題を成しているからである。

原書では副題として *Ein Bericht* が付されている。この「ホモ・ファーバーに関する報告書」あるいは「ホモ・ファーバーの報告書」という小説的ではない原題名は作品の特

---

[53] Frisch, Max."Peter Suhrkamp"*Forderungen des Tages* .49-52: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag.1983.　S.49

[54] homo sapiens が人類の学名であるのに対し、homo faber は「技術者としての人間」というギリシャ以来の哲学的概念である。分類的な意味としては、技術的・実際的に活動するタイプの人間を指し、思索的的なタイプの人間から区別される。

[55] Jonas, Hans. *Das Prinzip Verantwortung –Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*：Suhrkamp Taschenbuch Verlag. 1979. S.31

徴をよく表している。「報告書」は小説と異なり読み手に関する特定性が強い。*Homo faber* の報告書としての作成者は、Walter Faber であるが報告相手は誰であろうか。作品の世界の中では妻のハンナであると考えるのが自然である。しかし小説の語り手と読み手というメタ関係においてはどうであろうか。フリッシュの冠した原題には、homo faber の homo sapiens に対する報告、すなわちハンス・ヨナスの指摘する「道具的・技術的・部分的人間」の、「生の全体性」の当事者である人間一般（読者）に対する報告との意味が込められていると考えられないだろうか。

報告書は 2 部からなり第 1 部（第 1 のステーション）の作成日は 6 月 21 日から 7 月 8 日までである。それは、ワルターのニューヨークから中南米、ヨーロッパを巡る公私をない交ぜた旅行における旧友ヨアヒムの縊首現場との遭遇から始まり、娘ザベートとの出会いを別れた妻ハンナの回想を交えて記録し、アテネにおけるザベートの死をもって終わる。第 2 部（第 2 のステーション）ではアテネの病室における自身のがん手術までの時々刻々の様子が、ザベートの死以降の中南米に関わるビジネス旅行の経過とハンナに関する回想と共に交互に記録されている。それは記録・報告と謳っているが、ワルターの遺書でもある。

自分の娘との相姦が全くの偶然としてしか考えられない主人公ワルター自身にそれを語らせるとするならば、「起こり得る最悪の方向転換」を孕んだ時間の流れに沿ったドラマにはなり得ない。なかんずく体験という認識ないしは理解の仕方を拒否するワルターが、自身の悲劇的な体験を語る形式としては、事実の「説明 Erklären」を「理解 Verstehen」より優先する「報告書 Bericht」の形式にならざるを得ない。フリッシュは、この形式によって偶然性の運命化を阻止しようとする主人公の精神性を強調したと言える。「最悪の事態」を偶然と運命と摂理、さらには責任という意識空間において語るには「事後の報告形式」が最もふさわしい。そこでは事実の全体的な記録が重視され、価値判断は読者に委ねられるからである。フリッシュが Bericht とした必然性は、事件の当事者自身がその「生の全体性」の中で発生した最悪の事態を、説明的に語り得るための時と形式を付与することにあったと言えよう。一人の人間の「生の全体性」とは、死の瞬間にあたって本人だけが自覚し語ることができるものであるとすれば、ワルターの第 2 の報告書はまさにその瞬間の記録である。

Homo faber を *Ein Bericht* としたフリッシュの意図の背景には、小説家としての彼の名声を不動のものとした前作 *Stiller*（1954）との関係があることも指摘しておかなければならない。岩村行雄は、*Stiller* の小説技法を、自伝の問題と相関させて考察しているが、

その中で「この小説の方法では、ひとりの人間の真の存在を探るにあたっても、自伝的に過去を総体的に展望する方法は放棄され、〈いま〉、〈ここ〉に収斂する要素が提示されることとなる。モザイク的断片、客観性を保持し得ない記録、寓意的な物語、多様なパースペクティヴは、その帰結である」[56] と述べている。両作品には過去を回想する多くのプロットからなる第一部と、その帰結としての現在についての語りである第二部とから構成されているという共通性はあるが、*Homo faber* においては岩村が指摘する*Stiller* では収斂されきれていないものが、冒頭から収斂された物語となっている。そこでは、体験を排除し合理主義の因果性に固執するワルターの科学技術的精神に、物語の核心が収斂されている。*Stiller* の第一部は主人公Stiller が自分の存在認知を訴えるAufzeichnung（手記）であり、第二部ではその語り手である検事Rolf が「彼の手記の奔放さ、主観性、ねつ造性は驚くにあたらないが、…主観的経験の報告としては誠実なものである」[57] と述べている。これに対してワルターは、「主観と経験」を排除しようとしてBericht（記録・報告）を綴った。従って*Homo faber* のBericht（記録・報告） にはこの*Stiller* のAufzeichnungに対するアンチテーゼの意味が込められていると言えよう。

フリッシュがドイツ民族の罪意識につて古典悲劇を引き合いに出して述べた次の言葉は、本作品のテーマと形式の必然性に深くかかわっている。

> Das Geschehene endlich geschehen sein lassen ! Besonders obszön empfinde ich es, wenn man es mit Goethischem kleidet : mit dem schöpferischen Schlaf des Faust, mit dem heilenden Segen des Vergessens usw. Das allles darf der Erschütterte sagen, nur der Erschütterte. Zwar meinen wir, das Geschehen zu wissen, und zwar, wie jedermann sagt, zur Genüge. Ich habe noch wenige Erschütterte getroffen, so erschüttert, daß der Chor der antiken Tragödie einschreiten würde mit seinem : Genug ! [58]
>
> 私訳：起こるべきことは、結局起こしてしまえばよい! 私が特に嫌悪するのは、そのことをファウストの創造的な眠りだとか、忘却による至福の癒

---

[56] 岩村行雄「マックス・フリッシュ『シュティラー』における語り手の役割について－日記と自伝」『研究紀要』日本大学文理学部人文科学研究所 57 号、1999 年 P130

[57] Frisch, Max."Stiller" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008　S.690

[58] Frisch, Max."Tagebuch1946-1949" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008　S.252

しとかいうように、ゲーテ的に粉飾することである。生じたことに震撼させられた者だけが、その震撼の全てを語ることが許されるのだ。我々は『生じたこと』について知っていると思いがちである。しかも誰もが十分によく知っていると。しかし、古典悲劇のコロスさえもがもう十分とばかりに止めに入るような震撼すべきことに震撼させられた人に、私はそう多くは出会ったことがない。

1948 年に書かれたドイツの精神文化に対するこの反省が、10 年後の *Homo faber* において個人の内面性の問題として、オイディプスの悲劇にも相当すべき事件の当事者の「報告書」の形式をとって再提起されたと言える。そしてこの報告書という形式は、科学技術的人間である主人公の因果性を絶対視する精神が、震撼すべき自己の体験の悲劇性を矮小化しようとする意図からの帰結でもある。

4.2.作品世界のトポロジー

*Homo faber*の核になる事件は、ワルターとその娘ザベートの近親相姦という「悲劇」であるが、その悲劇をワルターの生の世界の全体を写像するトポロジー空間 [59] の特異点として理解することが、本稿の方法論である。それは、ホセ・オルテガの云う「ある人に起こったことは、全体としての彼の生がどのようなものであったかが知られて初めて認識できる」[60] に依拠している。作品世界は、ワルターの死の瞬間までも含んだ、その身に起こった諸事実の空間的、時間的、文化的な、全体としての有機的なトポロジーである。

ユネスコのニューヨーク駐在技術職員であるスイス人ワルターがラガーディア空港から出発しタマウリパ砂漠に不時着することから始まるこの作品の「第一のステーション」の前半における地理的位相は、ワルターの行跡としてヒューストン、タマウリパ砂漠、カンペーチュ、パレンケ、グアテマラへと中南米を貫き、時間的位相は 1950 年代のある年の初頭から春にかけてである。アメリカ文明の体現者であるワルターと別れた妻ハンナの義弟であるヘルパートは、メキシコとグアテマラの国境地帯における熱帯密林文化の中で、自ら縊首し果てたヨアヒムと対面する。ヨアヒムはワルターの旧友であり、ハンナの再婚相手であり、ヘルパートの兄である。ワルター自身の公的な日常は、ユネスコという世

---

59 トポロジー空間（位相空間）：数学用語。近傍、収束などの位相的構造を備えた集合。本稿では人生の多様な諸要素とその間の関係性の全体を包含する物質的、精神的世界のメタファーとして使用。

60 オルテガ, ホセ著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局 1969 年 P13

界的組織の中でアメリカ人ウィリアムズの管理下にあるが、私生活ではニューヨークのアパートにおいて、夫のいるアイヴィとの不倫状態にあり、自らを「アメリカンライフ」を地で行っていると自覚している。

後半の地理的・時間的位相は、春のニューヨークから始まり大西洋、パリ、アヴィニヨン、ピサ、フィレンツ、ローマ、コリントを巡って初夏のアテネに至る時間的空間的に変化する主人公のトポロジー空間である。大西洋航路の船上でザベートと出会うワルターの思索は天空まで拡大し、二人の心は感応し合う。パリからイタリアを経てアテネに至るドライブでは、ワルターの現代の科学技術的精神がザベートのギリシャ・ローマの古典文明への憧憬の前に翻弄される。天空の摂理に支配され平衡が保たれていると思われた時空の位相は、アヴィニヨンの新月の夜においてその秩序を破壊され、二人は予想もつかない深刻な事態に落ち込むことになる。事態が人倫の道として最悪であったことを、ワルターはアテネにおいて別れた妻を通して知るが、ザベートはそれを知らぬまま、コリントでの事故が原因で息を引き取る。地理的トポロジーとしては、ハンナの回想空間のチューリヒ、パリ、ロンドンが加わる。「第一のステーション」の生の世界のトポロジーは空間的には中南米から中央・東ヨーロッパまで、時間的にはギリシャ・ローマ時代から 20 世紀中葉までの広がりを持ち、ギリシャ・ローマ文化・ヨーロッパ大陸文化・アメリカ文化・開発途上国文化を包含している。

「第二のステーション」に於いては、ワルターが実際に存在する空間はアテネの病室に固定されるが、回想での移動空間はニューヨーク、カラカス、カンペーチュ、パレンケ、グアテマラ、カラカス、ハバナ、リスボン、デュッセルドルフ、チューリヒを経てアテネに至る。「第一のステーション」に引き続く出来事の時間の流れと場所の移動を含む時空の位相空間である。この回想の数週間の時空のベクトルは、ワルターの病室に於ける時々刻々の心身の変化のベクトルと合成され生の最期のトポロジー空間の全体を構成する。その中に、ハンナの記憶空間として孤高の老人アルミンとの心の交流にまつわるミュンヘン、チューリヒ、モスクワ、ロンドンの時空間が入れ子された構造となっている。

4.3.主人公ワルターの科学技術的精神

ワルターの生のトポロジーを構造的に支えているのは、科学技術的精神とその産物である「モノ」である。スーパーコンステレーション[61] で大空を旅し、大西洋を船舶で航行

---

61 当時の最新鋭大型旅客機　四発プロペラエンジン

し、ランドローヴァーでメキシコ・グアテマラの密林を踏破する。パリからコリントまでは、ザベートをエスコートするシトローエンでの長駆のドライブである。こうした空間移動のための先端機械装置に加えて、思考と記録のための道具としてのヘルメスベビー[62]と、身体ケアーのための電気カミソリが常に伴っている。この機械と道具に仮託される外なる技術と共に、確率論に仮託される内なる科学がワルターの科学技術的世界を構成している。

ETHを卒業したユネスコの高級電気工学エンジニアである主人公は、自身の娘との悲劇を報告する「第一のステーション」の冒頭に近い部分で「わたしは摂理とか運命といったものを信じていない、技術者としてわたしは確率の数式を計算する方に慣れているのだ」[63]、「われわれがありうべきことについて話しているときは、つねにありうべからざることもすでにその中に含まれているのであって、しかも可能性の極限として含まれているのだ。だからひとたびそれが、ありうべからざることが登場した以上、そこには、驚愕したり、神秘化したりするいかなる理由もないのである」[64] と、自己の立場についてマックス・ウェーバーの云う「学問および学問に裏づけられた技術による主知主義的合理化」[65]を行っている。　このワルターの生に対する科学技術的認識は、作品の中で一貫して変わることがない。不時着したタマウリパ砂漠では「何かを体験するだけのために無意味なことを空想することはできない。…。わたしはたんなる空想から不安がくることを拒絶する、またたんなる不安から空想的に、まさに神秘的に、なることも拒絶する」[66] と、「体験」という非合理的なものの領域を否定する。ワルターは「かれらは従来の合理主義がいまだ取り扱ったことのない唯一のもの、すなわちこの体験という非合理的なものの領域を、合理的意識にまでたかめてこれを仔細に吟味するのである」[67] とウェーバーが警告するタイプの人間であり、事物の本性を不可知のままに受け入れることができない合理主義者であると言える。大西洋の船上では、心惹かれるザベートに対して「…人間は機械でないという陳腐な論拠、これはいつもわたしを憤慨させる…」[68] とさえ語る。ザベートとの事態の悲劇性を知った後でもなお、問題を堕胎と自然の摂理の関係から考察し、妊娠中絶

---

62 ヘルメス社製小型携帯タイプライター

63 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年　P.25.

64 同　P.32.

65 ウェーバー,マックス著　尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫 1980 年 P.32

66 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P.36

67 ウェーバー,マックス著　尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫 1980 年 P.41-2
マックス・ウェーバーは、 引用箇所に引き続いて「非合理的なものを無理やり合理化しようとする現代の浪漫主義は、結局、矛盾におちいる(P 42)。」と述べている。

68 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P.110.

の正当性の議論へと本質のすり替えを行い、「われわれは技術的に生きているのだ、自然の支配者としての人間、技術者としての人間は」[69] と嘯(うそぶ)くのである。人口問題に関するこうした科学技術的論理は、ワルターの本意とは無関係に、かつてのナチスによる学問的オーラを伴った人種浄化の歴史を連想させずにはおかない。[70]

ザベートが自分の娘ではないかとの不安に対して「…ひそかに…休みなく、わたしの欲するとおりの答えがでるまで、計算をつづけた、彼女はヨーアヒム以外の人間の子供であるはずはない！…計算が、ほんとうにピタリと合うまで…。たしかなのはザベートの誕生日だけで、あとは、正確に言えば、わたしの安心が行くようにやった」[71] のである。ヘビに咬まれたザベートの死に対する不安感は、死亡率が 3～10%といわれる医学統計値によって希釈される。[72] 「第二のステーション」においても、自身の末期的な病状について、手術の論理性と統計的な成功率を拠り所として楽観し、ハンナとの再婚を夢見るワルターには、ザベートに対する償いの意識を伴った慙愧の思いのかけらもみられない。[73] ワルターの生のトポロジー空間は、最後まで反省の要素を含まないまま硬直的である。

岡本亮子は小説への確率論の根本的な影響を否定して、主人公のタイプを示す小道具と位置付け、「(アメリカ式生活様式) というものの産物」であるファーバーの属性の一つとして使われたとしている。[74] たしかに確率論だけがワルターの性格を形成しているわけではなく、また彼は決していわゆる技術者として連想されるような無味乾燥な人間ではない。ユネスコの一員として開発途上国援助に献身するテクノクラートであり、ヨアヒムとヘルパートのために職務の合間をぬってグアテマラを二度にわたって訪問する。ザベートに触発されてルーブルに足を運び、彼女をパリからアテネまでエスコートする。しかしハンナの人文科学的世界観とその生き様を最後まで理解することができない。フリッシュは、確率論を科学技術的方法の本質的な性格を表す「思考態度」としてワルターの精神に与えたのであって、単なる小道具として過少評価してはならない。

小道具というなら、それはワルターが常に携行し「報告書」を書くのに使った小型タイプライターのヘルメスベビーである。ハイデッガーは 1942-3 年の冬学期の講義の中でタ

---

69 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P.155-57

70 マウ, H クラウスニック,H. 内山 敏訳『ナチスの時代 - ドイツ現代史 - 』岩波新書 1961 年 P.72-4,145-48.

71 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P.180

72 同 P.193.

73 同 P.249

74 岡本亮子『マックス・フリッシュの小説世界』、東京：芸林書房、2000 年 P.120

イプライターについて次のように語っている。

> …タイプライターにおいては機械だが、すなわち技術というものが姿をあらわす。しかもそれは、書字すなわち言葉すなわち人間の本質的なあり方を際立たせるものにたいする、ほとんど日常的な、それゆえにまた気づかれることのない、それゆえにまた徴というものを欠いた関係において姿を現すのだ…[75]

ハイデッガーによれば、技術的産物であるタイプライターは「人間の本質的なあり方」の前に無標の存在であるという。しかし *Homo faber* においては、無標のタイプライターではなく、有標の「ヘルメスベビー」がワルターの死の間際まで、「物事を確率的に考える」というワルターの「本質的在り方」を際立たせている。ワルターのヘルメスベビーは、ワルターの確率的に考えるという「本質的な性格」を自らが記録する手段としての有標の小道具であるが、その小道具は因果の法則を絶対視するワルターの科学技術的精神を際立たせているのである。

出来事の因果関係を確率的に考えるということは、因果関係の希薄さを表象するものではない。反対に、一見希薄に見える因果関係を強固な論理性を持って是認しようとする精神の活動である。この確率論をとおして、ワルターの性格が圧倒的に科学技術的であり、因果性の論理から逃れられていないことが描写されているのである。したがって作者は、主人公の科学技術的精神そのものを問題視していると言える。ワルターの性格、ワルターの生き様を通して、科学技術的精神の本質的な問題が読者に投げかけられているのである。

4.4.運命・偶然・摂理

運命と摂理と偶然性に関して交錯するワルターの思いは、彼の生のトポロジー空間自体の力、あるいは特性から理解することができる。フリッシュとブレヒトの屋外プールにおける状況は、そのアレゴリーとして語り直すことができる。飛び込み台を作ったのは、ホモ・ファーバーとしてのフリッシュである。飛び込み台に上ったホモ・サピエンスであるブレヒトの視界は大きく開け、地上から見るのとはまったく異なった情景が迫ってくる。

---

75 キットラー、フリードリヒ著 石光泰夫 石光輝子訳『グラモフォン フィルム タイプライター 下』筑摩書房 2006年 P.157-8

ホモ・ファーバーは、構造物としての飛び込み台全体の安全性を保証する。これを信じてホモ・サピエンスは、飛び込み板の上を恐る恐るではあるが前進する。主柱の支持点からは遠ざかるにつれて、飛び込み板はたわみ、足元の角度の変化で滑り落ちる危険性は増すが、ホモ・サピエンスの精神は視界の様相の変化に魅されている。下方に小さくても生命の生気に満ちた泉のような新発見があればなおさらである。しかし飛び込み板が無限の長さをもっていたとしても、その撓みの角度が増したある地点でホモ・サピエンスは滑落するか、その前に飛び込み板自身が根元から折れるに違いない。もっとも考えられることは、足元のおぼつかない高みに立ったホモ・サピエンスは、情景の変化に目がくらみ、平衡を失って墜落するか、自ら跳躍してしまうかである。ワルターはこのシーンにおけるホモ・ファーバーでありかつホモ・サピエンスである。ザベートは、彼の視界に偶然に入った彼自身の作った命の泉である。このワルターの生のトポロジーを単純化したモデルとしてのアレゴリーは、オルテガの言う「だから事実の持つ現実性は、事実の中にあるのではなくおのおのの生の不可分の統一性の中にある」[76] を踏まえている。飛び込み台に立った人間に生じる「現実性」は、アレゴリーに込められた諸要素とそれらの諸関係の全体を通してのみ理解が可能なのである。

ワルターは、電気工学技術者としてスーパーコンステレーションから電気カミソリまで科学技術の産物の確かな世界の中で生き、確率論に仮託される科学技術的精神の飛び込み板の上に立って世界を認識し解釈している。この精神の無限の延長の先には、生のトポロジー空間の暗黒の特異点が待ち構えている。「摂理」とは実存者の生のトポロジーを支配する原理であり、トポロジー空間の歪みと実存者を暗黒の特異点へ吸引する力とをその属性とする。その属性の現前化が「運命」であり、オルテガが指摘する「事実の持つ現実性」である。実存者がその特異点の一つに落ち込むことは、実存者にとっては「偶然」としてしか認識されない。実存者ワルターの自由意思は、この飛込板の上を辿ってしまったのである。

ハンナ・アーレントは、その著書『全体主義の起源』の成立に関して「精神科学における方法。因果性はすべて忘れること。その代りに、出来事の諸要素を分析すること。重要なのは、諸要素が急に結晶化したできごとである。…」と述べている。[77] この「結晶化」は、オルテガの言う「全体性の統一」の凍結化とも言えよう。これに対してワルターの生の全体的パースペクティブにおける特異点は、この「結晶化」の対極としての「不在の集

---

76 オルテガ, ホセ著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局 1969 年 P13

77 矢野久美子『ハンナ・アーレント』中公新書 2014 年 P105

積点」であり、トポロジー的には激しい歪みである。諸要素は収斂せず暗黒の深みに飲み込まれる。 アーレントのドイツ民族の歴史的出来事に関する分析を個人の悲劇的な出来事に縮小投影するとき、「結晶化」は「虚の特異点」となって運命化する。ワルターは、ザベートを巡る悲劇の原因が自身の科学技術的精神によってその生のトポロジー空間の歪みをひきおこし、暗黒の特異点を顕在化させてしまったことだとは最期の瞬間まで気付かない。

九鬼周造は、

> 偶然のことがらであってそれが人間の生存にとって非常に大きい意味を持っている場合に運命というのであります。…人間にあって生存全体を揺り動かすような力強いことは主として内面的なことでありますから、運命とは偶然の内面化されたものである、というようにも解釈されるのであります。[78]

と述べている。ワルターのザベートとの邂逅は、生の全体的トポロジー空間における特異点への偶然的な落ち込みであるが、その事実を内面化して運命として認識する際の様相が問題となるのである。この偶然性の内面化[79] について九鬼は言う。「与えられた偶然を跳躍板として内面性へ向かって高踏するものでなくてはならぬ。…我々は偶然性の驚異を未来によって倒逆的に基礎づけることが出来る。偶然性は不可能性が可能性へ接する接点である」[80] と。

娘との悲劇的な邂逅という特異点にワルターは落ち込んだ。ならばこそ、その悲劇を重く受け止め未来への責任意識に基づく行為が求められてしかるべきであった。その未来的行為の欠如は、生の全体的トポロジーにおける特異点の暗黒性を特徴づけている。ワルターは、踏み込んだ跳躍板を蹴って未来に向かって高踏せず、それにしがみ付いたまま暗黒の深淵に引き込まれてしまった。確率的因果に固執する精神は、過去と現在だけからなる閉ざされた生のトポロジー空間の暗黒の特異点に引き込まれていく。先に述べたフリッシュ自身の言葉 “ Ich meine nicht Vergangenheit, ich meine nicht Gegenwart, sondern die Zukunft.“ の対極を行くワルターの姿である。

---

78 九鬼周造『偶然と驚きの哲学』 書肆心水 東京 2011 年 P.23-4
79 同 P.233-7
80 同 P.236

4.5 悲劇性

『ガリレオの生涯』では、ガリレオによる科学技術的精神の発見によってヨーロッパ人全体の生のトポロジー空間が飛躍的に拡張されたが、その結果としての人間性の解放はあらたな人間精神の矛盾を顕在化することとなった。『物理学者たち』ではその拡大されたトポロジー空間のメービウス的ねじれが人類の危機に直結することが示された。『ホモ・ファーバー』の提起する問題は、普通の人間の拡張された生のトポロジー空間に潜むブラックホールともいうべき暗黒の特異空間である。この特異空間は至るところに散在するが、ワルターにおいてはザベートとの近親相姦という悲劇として顕現したのである。この特異空間の現前化はワルターにとってはあくまで確率の問題であり、自己の責任の対象外であるとする。これに対してハンナは、ワルターの過ちが、彼の生のトポロジーにない人間関係の誤解の「体験」だったとし、それは決して偶然の過ちではなく、彼の職業や全生涯に起因するところの過ちであり、時間の中にある人生を単なる加算として扱い、その全体像に対する認識が欠如しているためだと語る。[81]　この全体性に対するハンナの指摘は、ワルターの理解では矮小化され、時間の不可逆性に背いたという反省に留まり「ザベートに対する過ちは…年齢なぞは存在しないかのように振舞ったことである。だから反自然なのである。ただ加算するだけでは、そして自分自身の子供たちと結婚するだけでは、われわれは年齢を破棄することはできないのだ」[82] としか考えられない。ワルターは、偶然の連鎖がザベートとの悲劇の原因であるとくりかえし述べている。偶然性に関するワルターとハンナの考えの違いは、フリッシュの次の言説によってより明らかとなる。

> 何かが起こるということは、その他の起こるかもしれないことが、起こらないということである。そのことは、個別の行為あるいは不作為として現れるのではない。われわれが決定的な事態に遭遇するとき、その事態は操作されるものの様相としてあらわれるが、操作されるものは操作するものが何であるか知らず、ただその決定的事態の様相に続くすべては別様の展開がありうるということを知るのである；最終結末は、必ずしも一つの転回として現れるのではなく、偶然の総合（Summe von Zufällen）の結果である…。[83]

---

81 フリッシュ、マックス著 中野孝次訳『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P257

82 同 P257

83 Frisch, Max."Schillerpreis-Rede 1965" *Öffentlichkeit als Partner* : Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1970.　S.98　私訳

これは、フリッシュが*Homo faber* を発表してから 8 年後の 1965 年に、シラー賞を受賞したときの講演からの引用である。生のトポロジー空間に生起する出来事を、ハンナは偶然の総合（Summe von Zufällen）として理解しようとしているのに対し、ワルターは偶然の単なる加算（als bloße Addition[84]）としてしか捉えていないことが明瞭である。

このワルターの偶然性の加算の論理からは、罪の意識も責任の意識も生じてこない。アテネに向かうスーパーコンステーションの座席で湧きあがった己の目にフォークを突き付けたいという衝動は、ザベートに対する罪と責任の意識からではない。「わたしにはもう見るべきものなぞひとつもないのだ。どこにももはや存在しない彼女の二本の手、…髪…櫛…動作…歯…唇…目…顔…どこにそれらを探したらいいのか？わたしはただ存在しなければよかったと思うだけだ。」[85] それはザベートに対する肉感を喪失したことに対する悲しみからであり、大西洋の船上でワイングラスをゆすった瞬間に沸き起こった男女の性の交わりに関わる倒錯的な衝動[86] となんら本質的に変わらない。

オイディプスは、妻イオカステが母であることが判明した運命の最悪の方向転換と同時に妻イオカステと共に罪を贖っている。イオカステは自死し、オイディプスは妻の黄金の留め金を両の眼球の奥深くに突き刺した。コロスは歌う。「これほどの苦患のうちにあっては、二重の不幸を嘆き、二重の不幸に苦しむのは何の不思議もない。」[87]「おお、わがテーバイの国の住人よ、見よ、これこそオイディプス、…いかなる悲運の浪に襲われしかを。されば、かの最後の日の訪れを待つうちは、…、いかなる死すべき人の子をも幸あるものと呼ぶなかれ」[88] と。本来、この『オイディプス王』と同じほどの悲劇性を帯びるべきワルター父娘の物語は、「見よ、これこそワルターとザベート、…いかなる悲運の浪に襲われしかを…」とのコロスを伴うべくもなく、単なる「偶然の事故」の報告に堕ってしまっている。先に引用したフリッシュのドイツ人の精神に対する危惧「震撼するもの自身がその深刻さを古典悲劇のコロスと同じほどには感じられない」ことが、ワルターの科学技術的精神を通して語られている。

増本浩子は、*Homo faber* とオイディプス神話についてそれぞれのプロットの相似性を指摘して論じる中で、「…最大の相違点、それはやはり神託が存在するかどうかという点

---

84 Frisch, Max. *Homo faber*: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag.1969.　S.212
85 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年　P.263
86 同　P.137
87 ソポクレス、高津春繁訳「オイディプス王」『ギリシャ悲劇全集Ⅰ』京都：人文書院　1962 年 P.263
88 同　P.269

だろう。オイディプス神話では、運命として機能する神託がすべての出来事の前提として存在している。…それに対してこの小説には、すべての出来事を収斂させることのできる神託は初めから存在しないのである。…」[89] と述べている。しかしワルターの精神の中には、すべてを収斂させることのできる科学技術的道具として、偶像化された確率論が支配的に存在していると言えるのではなかろうか。最大の相違は、オイディプスは自らの自由意思によって現実を直視し、受け入れ、責任を取ったが、ワルターにはその自覚がなかったことであろう。ワルターは、日数の計算によってザベートが自分の娘であるという現実から目を背けようとし、娘の死後も突き刺すべきフォークを放置した。ワルターの死は、日常的に気がかりであった胃がんの悪化によるもので、自らの意志によるものでも絶対者の摂理による運命の死でもないのである。

4.6 責任

ザベートとの悲劇が明らかになった後、彼女が横たわる病院に向かう車の中で衝撃に打ち沈むハンナに向かって、ワルターは車窓の外の景色を指して、ギリシャの工業化の必要性とそのための自分の働きの可能性を熱く語り、世界の進歩のために人生は歩き続けるものだと論じる。[90]　開発途上国の援助という自分の職業意識から生じた崇高な使命感と言えるが、ザベートに対する罪と責任を自らに問うべき時の思いとしては、作者が問題とするファウストの眠りからの創造的回生[91] というゲーテ的粉飾以外の何ものでもない。そして、自らの死を覚悟するベッドの上で、「この世に在るとは、光の中にあることだ。…光に固執すること。…その光の中で消滅するのだということを知りながら、それに固執すること。時間に…瞬間のなかの永遠に固執すること。永遠であるとは、存在したということなのだから」[92] と、いかにもゲーテ的に崇高な自由意思の有り様として自身の生きた生の全体を虚飾している。 その自由意思が、生のトポロジー空間の危険な暗黒点につながっていたことへの責任意識は見られない。

ワルターの「第 2 のステーション」の報告の最終場面は、専らハンナへの思いと回想で占められている。ハンナの生のトポロジー空間は、ワルターのそれと較べて圧倒的に多様であり、ワルターをして「わたしは彼女に驚嘆する」と述懐せしめている。[93]　ユダヤ系

---

89 増本浩子「『ホモ・ファーベル』とオイディプス神話」『姫路独協大学外国学部紀要』16 号、2003 年、P.143

90 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P.233-35

91 ゲーテ、相良守峯訳『ファウスト第二部』東京：岩波書店　1991 年　P.7-14.

92 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年 P.302.

93 同　P.213

ドイツ人としてチューリッヒで古典言語学と美術史を学び、ワルターとの間にザベートを懐胎したまま結婚を拒絶した彼女は、その後ヨーアヒムと結婚し亡命するが、離婚しドイツ軍から逃れて英国に移住する。その間一人でザベートを育てながらＢＢＣのドイツ語アナウンサーとなり、コムニストのビーバー氏と結婚する。ビーバー氏をナチスの収容所から救出したりもするが、たんなるオポチュニストであるとして彼を見捨てる。こうしたハンナの生のトポロジー空間に生じた最大の特異点は、娘ザベートの出生にあたってその父であるワルターの父性を拒絶したことである。「…何しろそれは彼（ヨーアヒム）の子供ではなく、またわたしの子供でもなく、父親のいない子供、つまり彼女自身の子供、男というものには全く関係のない子供だったのだから」[94] とのワルターの述懐は偽りではない。しかしハンナは、「父性の否認」の責任を自分の生の全体を賭けた娘への愛によって償おうとした。彼女の生のトポロジー空間を支配したのは、ザベートに対する絶対的な愛であり、かつそれは「子供に関係のあるすべてのことにおいて自分を唯一のそして最終的な最高法廷として見なしている」[95] とワルターが批判的に述懐するような愛であった。

ハンナの生のトポロジー空間に生じた「父性の否認」という特異点（事象）は、偶然や宿命ではなく、ハンナ自身が企て、自身が責任を負うとする特異点である。それは、ワルターの暗黒の特異点と異なり、ハンナの生のトポロジー空間の驚くほどの多様化に作用している。ワルターとハンナのこの対極的に見える生のトポロジーに共通するのは、それが共に「偶像」によって律せられ、支配されているということである。「科学技術的精神」と「父性を否認する愛」という偶像である。本来家族であるべきワルター、ハンナ、ザベートを包含する生の統一的トポロジーは父性の否認によって分極してしまった。 分極されたハンナの生のトポロジー空間は、ザベートに対する愛の充満によって多様化された半面、ザベートの悲劇に直面するも、母性としての激しい悲しみをもその中に閉じ込めてしまう。最悪の悲劇を知ってしまった時のハンナの嘆きと怒りは、ワルターには向かわない。「彼女のすすり泣きはだんだん声高くなっていって、わたしが彼女の部屋のドアを叩くまでつづいた。」[96] 両者の生のトポロジー空間を隔てる越えがたい壁を、ハンナの側が固持しつづけるのである。一方のワルターの生のトポロジー空間では、父と娘の相姦と言う暗黒の特異点が顕現し、それは破滅への吸引力として作用することになってしまう。しかし血縁としてのこの家族に生じたハンナによる「父性の否認」とワルターによる「父性の

---

94 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年　P.305
95 同　P.305
96 同　P.223

暴虐」との間には、本来何の因果関係もないのである。ワルターもハンナもそれぞれが、自分が生きた生の全体においてザベートに対する責任を全うしなければならないはずであった。

ザベートとの悲劇を契機に、その母である別れたハンナが、今病室で目の前にいるという事実、その計り知れない生の全体性の奥深さの中でさえ、ワルターの想念は些細な偶然性に向けられる。「…ローマからの（わたしの）電報が折よく彼女にとどいたのは、まったくの偶然であった。…彼女はちょうど、管理人に鍵を渡すために、空の住居にきていたのだ」[97] とハンナとの再会が可能となった原因としての偶然をことさらに強調する。ワルターの偶然性の認識は、すべてを科学技術的因果性の論理を前提として理解しようとする精神から生じており、それは生涯変わることがない。その精神からは罪の意識も責任の意識も生じない。自分とは異なる人文科学的な生のトポロジー空間に生きるハンナが、ザベートをいかに自分だけのものとして愛したかを思い知らされたワルターに対してハンナは、「あなたはわたしのことを許すことができて？」[98] と泣きながら彼の手にキスをする。ハンナは何故赦しを請わなくてはならないのか。彼女は彼女なりの人文科学的な生の全体的トポロジージーを自覚的に生きてきたが、その全体性がもたらしたザベートの悲劇に責任を感じたのに違いない。それは謝罪と言うより、生じてしまった悲劇を共に嘆き、責任を共有しようという和解の申し出ではなかったのか。ワルターには、このハンナの気持ちを理解することができない。ましてや、謝るべきは自分であるべきとは考えてもみないのである。分極化された両者の生のトポロジー空間が、責任の共有によって再統合される最後の機会は、永久に失われてしまった。

「報告書」と謳った物語は、手術室からの迎えが来る（それは死の暗示であるが）直前に報告者である主人公ワルターが残した最後の記録「しかしそのハンナでも予感することができなかったのだ、ザベートがこの旅の途中でまさに彼女の父親に会おうとは、そして彼がすべてを破壊してしまおうとは―　八時〇五分　彼らが来た。」[99] で終わる。最期に及んでなおhomo faberたるワルターの精神は、事態の戦慄すべき悲劇性に思いが及ばない。合理主義者であるワルターにとっては、未来はあくまで「予測」可能でなければならない。臨終の床にあって、経験主義者のザベートの前にその確信は揺らぐが、経験主義者といえども未来は少なくとも「予感」できるものではならないとの思いは断ち切れない。

---

97 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 同　P.303
98 同 P.309
99 同 P308

このワルターの姿こそが、因果性の呪縛から最後まで解放されないホモ・ファーバーの姿である。このことは、第一ステーションにおけるザベートとの最初の出会いを回想する冒頭の以下の記録から少しも変わっていない。

> わたしの予感能力のなさ、知る能力のなさを証明してみせたとことで、それが何になろう！わたしはわが子の一生を破壊してしまったのだ、そしてもうそれを元に戻すことができないのだ。だのに何のための報告か？わたしは…恋したのではなかった…、わたし自身の娘であることを感づくことができなかった、…自分が父親になっていることさえ知らなかったのである。どうして摂理なのか？…わたしの娘とわたしが、話し始めることになったのは、ありそうもない偶然からだったのだ。…互いにそのまま通り過ぎてしまうことだって、同様にありえたのである。どうして摂理なのか？事態はまったく違ったようになっていたかも知れないのである。[100]

本来持たれるべきワルターのザベートに対する罪と責任の意識は、原因としての偶然の連鎖を追求する精神の中で極端に希釈され曖昧化されている。確率論的因果性[101]への執着からは、原因の原因という因果の連鎖は遡及できない。しかし原因としての偶然の連鎖は確率論の誤用[102]によって恣意的に、従って無限に遡及することが出来、その遡及の階梯を辿るごとに責任意識は希釈され曖昧化される。*Homo faber* は、「震撼すべき体験」をした者だけが死を前にしてなし得る「生の全体性」の記録（Bericht）であるが、その報告者としてのワルターの責任意識は最後まで曖昧である。九鬼は先の引用箇所に引き続いて「…一切の偶然性の驚異を未来によって強調することは『偶然－必然』の相関を成立させることであって、また従って偶然性を真に偶然性たらしめることである。これが有限なる実存者にあたえられた課題であり、同時にまた、実存する有限者の救いでなければならぬ」[103]とのべている。ワルターは、その震撼すべき偶然の体験に関して運命の驚異を感じることを拒絶する。それは、確率論的因果性を偶像化している科学技術的精神のなせ

---

100 フリッシュ、マックス（中野孝次訳）『アテネに死す』、東京：白水社、1991 年　P.106-7.

101 渡部　博「ポスト経験主義の科学論」『科学論－岩波講座・現代思想』岩波書店 1994 年 P192

102 小林道正『デタラメにひそむ確率法則』岩波書店 2012 年
確率論の厳密な定義はコルモゴロフの公理によって与えられる。事象の集合としての位相空間において、その要素が確定されている場合にのみ確率計算は意味をなす。ワルターがザベートと大西洋航路の船上で出会う確率は一様には確定できない。

103 九鬼周造『偶然と驚きの哲学』 書肆心水 東京 2011 年 P.236-7

る業である。体験を、その神秘性を疑うことなく受け入れることが出来ない硬直した合理主義者の精神の不毛性に、読者は震撼させられる。

責任意識の欠如の不毛性は、ユダヤ人虐殺に関係してドイツ人の精神に潜むbanality of evil「悪の陳腐さ」[104] として、1963 年にハンナ・アーレントによって鋭く糾弾されることになる。それに先立って 1957 年にフリッシュが*Homo faber* で警告したのは、banality of evilを育んだ同じ土壌に芽生えたbanality of intelligence（「知性の陳腐さ」）であると言える。フリッシュもアーレントも戦後ドイツの国民意識の中に蔓延したゲーテ的な「もの」や「こと」によるナチズム時代の責任の隠蔽[105] を嫌悪した。アーレントが民族としての悲劇を問題としたのに対し、フリッシュは個人としての実存者の悲劇を扱った。悲劇とは深刻な出来事とともに責任を内包したところに成り立つのであるが、ワルターの科学技術的精神は、戦慄すべき悲劇に直面したとき、原因としての出来事の連鎖を追求するという因果性の論理に固執し、責任という重大な要素を外在化してしまった。因果性に固執する科学技術的精神の一つの有り様が、責任意識の曖昧化という倫理的崩壊をもたらすことをフリッシュは訴えている。

---

104 Arendt, Hannah. *Eichmann in Jerusalem*: New York, Penguin Classics.1963.　P.252

105 三島憲一『戦後ドイツーその知的歴史 - 』岩波新書　1991 年 P.23-4,38-44,101-06
矢野久美子『ハンナ・アーレント』中公新書　2014 年 P126

[5] 結び

フリッシュにとって、ドイツ民族の犯したナチズムの震撼すべき罪の清算は戦後の創作活動の主要なテーマであった。したがって*Homo faber* 以前のいくつかの作品においても、ワルターの精神的な土壌の背景にあるドイツとユダヤ民族の経験した悲劇がテーマとして取り上げられている。*Nun singen sie wieder*（1945）は、捕囚されていた 21 名の市民が、SS隊員によって歌いながら次々と銃殺されていった事件を巡る戯曲である。その中で、銃殺を実行した隊員カールの父親である校長は、「お前の罪ではない、すべては命令されたことだ。わたしたちの罪ではない。」[106] と語る。戦争を生き延びた兵士エドアルトは、かつての上官だった亡き大尉の妻ジェニーに対して「一緒に再建しよう、ジェニー」[107] と語り掛ける。「もとのように？」とジェニーは問い返す。しかし戦いで逝った大尉は、舞台の背後から「わたしたちの家を、ジェニー、もとどおりにしないでくれ！」[108] と叫びかけるが、その声は誰にも届かない。この戯曲は、戦後間もないドイツでの上演の直後から賛否の渦にさらされている。ケストナーは、個人の罪が民族の全体的な罪に繋がっていくことを描いたレクイエムであると高く評価したが、[109] ナチスズムを忘れようとしながら復興の道を歩みだしたドイツ国民からは、必ずしも快く受け入れられなかった。スイス人であるフリッシュによる過去の蒸し返しとして、近親者である当事者からの反発を呼んだわけである。それから約 10 年後、ナチズムの悲劇の風化に危機感を抱いたフリッシュは*Homo faber* において、風化をもたらしているものが何なのかを問い直そうとしたと言えるのではなかろうか。その問いかけは、スイス人ではあるがあくまでドイツ民族の一人として、悲劇の当事者としてのものである。

ワルターの性格は、*Andorra* や *Stiller* に登場するスイス人特有のアンビバレンツなメンタリティーからは一線が画されていて、逆にコスモポリタン的である。コスモポリタン化されたスイス人でありゲルマン人である主人公ワルターによって、ドイツ民族に特有なこととして批判の対象にされるナチズムの犯した震撼すべき罪と責任の問題が、確率的因果の論理から逃れられない科学技術的精神という人類一般の問題として普遍化されているのである。従ってワルターに対する批判は、糾弾であってはならない。もし彼がその生の全体性を完結する瞬間の死の床にあって、なお“Bericht” を記録し続けることが出

---

106 Frisch, Max.“Nun singen sie wieder” *Frühe Stücke Santa Cruy/ Nun singen sie wieder*: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1975　P.105

107 同 P.135

108 同 P.136

109 Erich Kästner:Ein wichtiges Stück, *Der Spiegel*（Hamburg）11.Januar, 1947. S.17

来たとしたなら、その最後の言葉はヨブの以下の叫びと重なっていたであろう。

> Habe ich wirklich geirrt, so trage ich meinen Irrtum selbst. Wollt ihr euch wahrlich über mich erheben und willt mir meine Schande beweisen? [110]
>
> 私訳：わたしがまことに間違っていたとしても、その間違いはわたし自身のことです。あなたがたは、本当にわたしに対して高ぶり、とがめだてしようと云うのですか。

フリッシュは、ワルターにこれと同じように叫ばせることを、Bericht という語りの形式によって抑制しているが、読者も彼をとがめだてすることは出来ない。核エネルギー、高度情報通信、応用生命科学等々の科学技術の圧倒的な支配下にあって我々homo sapiens の精神は、ガリレオ以来変わることなく homo faber 的、科学技術的であり、そのこと自体に起因するカタストロフィの不安の影から逃れられないでいるからである。ワルターの間違はワルターだけに止まらない。それは人類一般の間違となる危険性を孕んでいる。

Homo faber を科学技術的精神に対する批判の書として読む本稿の立場から、フリッシュの一連の作品を時系列的に概観すると：*Die Chinesische Mauer*（1947）では、核兵器の絶対性により歴史の定説的な価値評価が覆され、*Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie*（ 1953）では、科学がその独善性によりAsyl化し、*Biedermann und die Brandstifter*（1958）では、大量破壊兵器の開発を市民が黙認し隠蔽される科学技術が描かれている。1957 年の*Homo faber* はこれら一連の作品の中で、道具あるいは技術としての科学による我々市民の倫理崩壊が警告されている点において突出して重きをなしている。しかしこの崩壊は、フリッシュの晩年の作品*Der Mensch erscheint in Holozän*（『人類は完新世 [111]に生まれた』1979）において自然を畏敬し融合することによって生の全体的トポロジーの秩序の回復に向かう科学精神として復活する。

この作品の主人公であるバーゼル出身の退役企業家ガイザーの死の瞬間は、ワルターのそれと大きく異なる。それは、娘のコリーネに看取られながらの、平凡な生活世界におけ

---

110 Das Buch Hiob 19:4-5, *Die Bibel Luther-Übersetzung,* Deutsche Bibelgesllschaft Stuttgart, 1984. S.535

111 日本地質学会監修『地球全史スーパー年表：解説』岩波書店 2014 年 P.21-3
homo sapiens は更新世（258 万 8000 年～1 万 1700 年前）の末期に出現したが、文明の発生、発展は完新世（1 万 1700 年前～現在）になってからである。

る誰にもありそうな死である。しかし直前まで、南スイスの山岳地帯の寓居からノアの大洪水を思わせるような風雨のなかに踏み出し、自然の脅威の中での自身のアイデンティティを確かめようとしている。彼の部屋の壁は、書物からの切り抜きの「知識」で埋められている。ワルターは最後まで homo faber であったが、ガイザーの死は、homo sapiens を育んだ完新世以来の自然と現代文明との融合であることを次の一節が示唆している。

> Alle die Zettl, die an der Wand oder auf dem Teppich, können verschwinden. Was heißt Holozän! Die Natur braucht keine Namen. Das weiß Herr Geiser. Die Gesteine brauchen sein Gedächtnis nicht.[112]
>
> 私訳： 壁に貼られたり、床に散乱したりしている切り抜きは皆無くなってもよいものだ。完新世が何だというのだ！自然に名前など要らない。ガイザー氏は理解した。岩石は彼の認識能力とは無関係に存在していることを。

フリッシュにおける科学技術的精神の破滅から再生への道のりを辿りなおすことは、本稿の今後に残された課題である。

---

112 Frisch, Max. *Der Mensch erscheint in Holozän.* Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag.1979. S.139

あとがき

卒業論文のテーマについて当初は、愛読のカフカ『城』をとりあげてみようと一番に思った。しかしカフカについては膨大な研究なされていて、かえって論考しにくいのではないかと思われ、フリッシュなら多少なりとも独自性を出せる様な気がした。1969 - 71 年ドイツに滞在中、フリッシュはベストセラーだったので、何とかくらいついて数作品を読んだことが記憶に甦ってきたからである。

これまで『ホモ・ファーバー』を原書で 2 回ばかり読んでいた範囲で、ワルターとザベートの近親相姦は両者に仮託された自然科学と人文科学の近親相姦であるとの読み方が出来るのではないかとの仮説をたてた。それも面白いかも知れないと、香田先生から言っていただいたのでとりかかった。しかし、この仮説を論考することは荷として重過ぎたし、フリッシュの一連の作品を読んでいくうちに作家の科学批判の変遷に注目するようになった。

こうした中で、先生から同時代の他の作家の科学批判についても調べるようにとの指摘を受け、ブレヒトとデュレンマットを読むことになり、さらにオルテガやフッサールまで科学批判の源流を遡ることとなった。更にフリッシュの日記や講演など作品以外も当たって行く中で、作家がナチズム、ドイツ民族、世界大戦、核兵器といった 20 世紀の人類の背負った過酷な重みにいかに向き合ったかが鮮明になってきた。論文内容は、こうした経過を経て変遷しタイトルも変更した。

方向が定まったあと受講した 2 シーズンにわたる夏季スクーリングや講師派遣の授業では、論考を見直し深めることにつながる非常に多くの知見を得ることができた。問題意識を持って学ぶことの重要性を再認識するとともに、大きな充足感が得られた。

あらためて振り返ると、40 年間以上技術系人間として企業での生活を送る間抱きづづけた問題意識を、結果的にとり上げたのではなったかと強く感じる。フリッシュも技術を生業とするところから出発していることに、近親感を感じてきた。それが却って自分の視野を狭くしているのではないかとの懸念はあるが、「結び」で述べた今後の課題に是非とりくみ、現実の世界像の中での自分自身の生のトポロジーを再確認したいと思っている。

ご指導いただいた香田芳樹先生と、晩年の学業に理解を示してくれた家族に、心からお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

2015 年　初夏

準拠テキスト

Brecht, Bertolt. *Leben des Galilei*：Berlin , Suhrkamp Verlag, 1963.

Dürrenmatt, Friedrich. *Die Physiker*：Zürich, Diogenes Verlag AG, 1998.

Frisch, Max. *Homo faber*: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag.1969.

デュレンマット,フリードリッヒ著 山本佳樹訳『デュレンマット戯曲集第二巻』鳥影社　2013 年

フリッシュ、マックス著 中野孝次訳『アテネに死す』白水社、1991 年

ブレヒト著 谷川道子訳『ガリレオの生涯』光文社　2013 年

参考文献

[2] マックス・フリッシュ：人とその時代

Der Ingenieur,　*Der Spiegel* (Hamburg) 25.Dezember, 1957　S.54-56

Frisch, Max. "Festrede 1957 " *Öffentlichkeit als Partner*　Frankfurt am Mein,　Suhrkamp Verlag, 1970. 7-14.Print

Frisch, Max. " Kultur als Alibi 1949 " *Öffentlichkeit als Partner*　Frankfurt am Mein,　Suhrkamp Verlag, 1970. 15-24.Print

Frisch, Max."Stiller" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008 360-717.Print,

Frisch, Max."Tagebuch1946-1949 Autobiographie" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008　212-18. Print,

Frisch, Max. " Unsere Arroganz gegenüber Amerika 1952 " *Öffentlichkeit als Partner*　Frankfurt am Mein,　Suhrkamp Verlag, 1970. 25-35.Print

Frisch -Ohne Uhrlaub von der Zeit, *Der Spiegel* (Hamburg) 7.Oktober, 1953 S.27-31

ヘーゲル著　長谷川宏訳『歴史哲学講義』岩波文庫 1994 年

[3] フリッシュと同時代の他の作家における科学技術的人間像

Frisch, Max. *Erinnerungen an Brecht*：Berlin , Friedenauer Presse, 2009. Print

Frisch,Max."Tagebuch1946-1949"Romane,*Erzählungen,Tagebuch*: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008 Print

オルテガ, ホセ 著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局 1969 年
ガリレイ, ガリレオ著 今野武雄、日田節次訳『新科学対話（上)』岩波文庫 1937 年
フッサール, E 著、細谷恒夫・木田元訳「ガリレイによる自然の数学化」『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』1974 年 中央公論社 P38-84
伊東俊太郎「ガリレオと科学・宗教」『伊東俊太郎著作集第 6 巻』麗澤大学出版会 2010 年 P17-27,246-254
内尾一美「デュレンマットの『物理学者たち』について」『山口大学教養部紀要』11 号 1977 年、69-77 頁
酒井謙一「科学者と社会ーデュレンマットの『物理学者たち』ー」『京都工芸繊維大学繊維学部学術報告』 23 号 1999 年 13-22 頁
聖書『歴代誌・下』3：1-14
増本浩子「フリッシュとデュレンマット」『姫路独協大学外国学部紀要』15 号、2002 年 157-71 頁

[4] <u>フリッシュ『ホモ・ファーバー』における科学精技術的精神の破綻と責任意識</u>

Arendt, Hannah. *Eichmann in Jerusalem*: New York, Penguin Classics.1963. Print
Frisch, Max."Nun singen sie wieder" *Frühe Stücke Santa Cruy/ Nun singen sie wieder*: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1975 79-139.Print,
Frisch, Max."Peter Suhrkamp"*Forderungen des Tages* .49-52: Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag.1983. Print
Frisch, Max."Stiller" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008 360-717.Print,
Frisch, Max."Tagebuch1946-1949" *Romane, Erzählungen, Tagebuch*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 2008 Print,
Jonas, Hans. *Das Prinzip Verantwortung –Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*：Suhrkamp Tascenbuch Verlag. 1979. Print
Frisch, Max."Schillerpreis-Rede 1965" *Öffentlichkeit als Partner*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag, 1970. 90-9.Print
ウェーバー、マックス著 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫 1980 年
オルテガ、ホセ 著、佐々木孝訳『ガリレオを巡って』法政大学出版局 1969 年

キットラー、フリードリヒ著 石光泰夫 石光輝子訳『グラモフォン フィルム タイプライター 下』筑摩書房　2006 年 P.123-288

ゲーテ、相良守峯訳『ファウスト第二部』岩波書店　1991 年

ソポクレス、高津春繁訳「オイディプス王」『ギリシャ悲劇全集 I 』京都：人文書院　1962 年

マウ, H. クラウスニック,H. 内山 敏訳『ナチスの時代 - ドイツ現代史 - 』岩波新書　1961 年

岡本亮子『マックス・フリッシュの小説世界』、芸林書房、2000 年

一ノ瀬正樹『原因と結果の迷宮』 勁草書房 2001 年

岩村行雄「マックス・フリッシュ『シュティラー』における語り手の役割について－日記と自伝」『研究紀要』日本大学文理学部人文科学研究所 57 号、1999 年 119-131 頁

九鬼周造『偶然と驚きの哲学』 書肆心水 東京 2011 年

小林道正『デタラメにひそむ確率法則』岩波書店 2012 年

増本浩子「『ホモ・ファーベル』とオイディプス神話」『姫路独協大学外国学部紀要』16 号 2003 年 126-43 頁

三島憲一『戦後ドイツ－その知的歴史－』岩波新書 1991 年

矢野久美子『ハンナ・アーレント』中公新書 2014 年

渡部　博「ポスト経験主義の科学論」『科学論－岩波講座・現代思想』岩波書店 1994 年 P171-195

[5] 結び

Das Buch Hiob, *Die Bibel Luther-Übersetzung,* Deutsche Bibelgesllschaft Stuttgart, 1984

Erich Käatner:Ein wichtiges Stück, *Der Spiegel* (Hamburg) 11.Januar, 1947. S.17

Frisch, Max. *Der Mensch erscheint in Holozän*：Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag.1979. S.139

日本地質学会監修『地球全史スーパー年表：解説』岩波書店 2014 年